

## 2020年度 独創的研究助成費 実績報告書

2021年3月26日

|         |   |      |          |       |                  |           |
|---------|---|------|----------|-------|------------------|-----------|
| 報告者     | 学科名   | 看護学科 | 職名       | 助教    | 氏名               | 犬飼(岡野) 智子 |
| 研究課題    | クリティカルケアに携わる看護師・救急救命士の SBAR の認識と活用に関する研究  |      |          |       |                  |           |
| 研究組織    | 氏名  | 所属・職 |          | 専門分野  | 役割分担             |           |
|         | 代表  | 犬飼智子 | 看護学科・助教  | 成人看護学 | 統括               |           |
|         | 分担者   | 名越恵美 | 看護学科・准教授 | 成人看護学 | アンケート作成<br>データ分析 |           |
| 研究実績の概要 | <p>医療事故の原因は、7割近くがコミュニケーションエラーと言われている。医療現場では、コミュニケーションが不可欠であり、特にクリティカル場面においては救急救命士及び看護師からの報告は、医師の判断に影響するため情報伝達の在り方が重要になってくる。職種間のコミュニケーション改善は医療安全推進における課題の1つであるといわれている。正確な情報の伝達、情報共有、および共通認識が重要であり、患者、家族や職員間のコミュニケーションエラーを防止することが望まれる。</p> <p>そこで、必要な情報を端的に伝達するためのツールとして効果が検証され、クリティカル領域で多くの施設で使用されているSBARに着目した。SBARとは、「S (Situation) 状況」、「B (Background) 背景」、「A (Assessment) 評価」、「R (Recommendation) 提案」の順で、必要な情報を伝達し、コミュニケーションを標準化するツールである。</p> <p>本研究は、チーム医療において多職連携を担っている職種の中で、クリティカルケアに携わる看護師・救急救命士および看護学生の SBAR の認識と活用について明らかにすることを目的とした。</p> <p>A市の消防署に勤務する救急救命士、救急外来を有する3施設のクリティカル領域で勤務する看護師、臨地実習を終了した看護学生を対象とし、質問紙調査を実施した。</p> <p>救命士は、96部(回収率88.1%)の回答があり、有効回答数は91部であった。<br/>看護師は、53部(回収率39.8%)の回答があり、有効回答数は50部、看護学生は回収数・有効回答数は33部(回収率73.3%)であった。</p> <p>1. SBARの認知状況</p> <p>救命士は「知らない」が78名(85.7%)と最も多く、次いで「内容は説明できないが言葉は聞いたことがある」が12名(13.2%)、「説明できる」が1名(1.1%)であった。<br/>看護師は「聞いたことがある」が20名(40.0%)と最も多く、次いで「説明できる」が17名(34.0%)、「知らない」が13名(26.0%)であった。<br/>看護学生は、「内容を説明できる」が20名(60.6%)、「聞いたことがある」10名(30.3%)、「知らない」が3名(9.0%)であった。</p> |      |          |       |                  |           |

※ 次ページに続く

|                     |  |
|---------------------|--|
| <p>研究実績<br/>の概要</p> | <p>2. SBAR の研修の受講状況<br/>救命士は「ない」が91名(100.0%)であった。看護師は「ある」が19名(38.0%)、「ない」が31名(62.0%)であった。看護学生は「ある」が24名(72.7%)、「ない」が9名(27.2%)であった。</p> <p>3. SBAR の利用状況<br/>救命士は「使用していない」が91名(100.0%)であった。看護師は「使用していない」が36名(72.0%)、「使用している」が14名(28.0%)であった。看護学生は「使用していない」が24名(72.7%)、「使用している」が9名(27.2%)であった。</p> <p>救命士のSBARの認知は非常に低く、実際に使用されていなかった。看護師も認知は7割を超えているものの、実際の使用は3割であった。救命士・看護師間において、現時点で多職種連携のための標準化された情報共有ツールとして、SBARを使用できないと考えられる。</p> <p>学生は、SBARの講義を受けたことがある者は8割以上おり、SBARの認知度も9割超であった。しかし、実際にSBARを利用している学生は3割未満にとどまった。これは、実習中の看護師への報告は、内容の伝達に精一杯になり、SBARを使用する余裕がないためではないかと考える。</p> |
| <p>成果資料目録</p>       | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 上原彩奈、土井晴日、斎藤櫻、犬飼智子、名越恵美：緊急時の報告における看護師のSBAR使用状況、日本看護研究学会中国・四国地方会 第34回学術集会、59、2021.</li> <li>2. 土井晴日、斎藤櫻、上原彩奈、犬飼智子、名越恵美：学生のSBARの認知と臨地実習での使用状況、日本看護研究学会中国・四国地方会 第34回学術集会、60、2021.</li> <li>3. 斎藤櫻、上原彩奈、土井晴日、犬飼智子、名越恵美：救急救命士・看護師のSBARの活用状況と報告の実際、日本看護研究学会中国・四国地方会 第34回学術集会、61、2021.</li> </ol>   |